



©PACO

みやがわ・あきら／1961年生まれ。東京芸術大学在学中から劇団四季、東京ディズニーランドなどのショー音楽を担当。ミュージカルやドラマ音楽を多数手がける。代表作にNHK Eテレ「クインテット」、NHK連続テレビ小説「ひよっこ」、『ONE MAN'S DREAM』、『身毒丸』など。2014年からOsaka Shion Wind Orchestra音楽監督。

01 「見る」とは何かを 考え続ける会社

作曲家

宮川彬良さん Akira Miyagawa

メニコン創業60周年を記念して作られたオペラ「あしたの瞳」。田中恭一会長の半生をモチーフに、「真実を“見る”とはどういうことか」を問いかけている。作曲を手がけた宮川彬良さんが感じた、メニコンの魅力とは。

文＝大室みどり（編集部） 写真＝松永卓也（写真部／P57左） 写真提供＝メニコン（P57右）

メニコンとの関わりは、2001年に創業50周年を記念した曲「開眼」を作ったことに始まります。その8年後、今度は「私の父のことをオペラにしてください」と田中英成社長から依頼されました。世界に何人そのセリフを言える人がいるんだろうと驚きました。

僕は数多くミュージカル作品を手がけてきたけれど、オペラは初めて。苦手意識すらありました。初めて見たオペラがミラノ・スカラ座の初来日でしたが、観客のご婦人たちの香水の匂いがきつくて。音楽を楽しむでもなく、「美しいお声でしたわね。おほほ」と「裸の王様」をたたえているような感じが肌に合わなかったのです。

完成までに3年をかけた
初の書き下ろしオペラ

戸惑いはありましたが、脚本を音楽にする自信はありました。脚本次第だと思っていたら、響敏也さんの脚本は言葉の時間感覚とは違う、音楽の時間感覚を理解した上で書かれていた。しかも戦争と平和を横軸に、田宮常一（田中恭一会長をモデルにした主人公）が本当は何を見ていたのかということ縦軸に描

かれた文学的なものでした。音楽のもととなる文学がたっぷりそこに蓄えられていたんです。

全3幕、計2時間半のグランド・オペラ。まず書いたのは、常一とやがて妻となる君代のデュエット「過去を見続けるために」と「なぜ何故なぜ」の2曲。その後、最初の小節から順に、音が聞こえてきて導かれるように曲を書きました。常一の物語に突き動かされたんですね。

作曲できたところまでを数回に分けて小出しに社長に発表させてもらいました。最後はギリギリになってしまつて、メニコンのHITOMIホールを貸し切りにしてもらつて1週間1人で合宿。発表会の前日によくやぐでさがありました。そこからオーケストレーションにも約3か月かかり、完成までには3年くらい費やしました。

エンターテインメントもアーティストもめざす頂点は同じ。見ていて共感できて、おもしろくなくっちゃ。常一がコンタクトレンズ作りにかける情熱を歌う「もうひとつの瞳」ができた時はうれしかったですね。こんなにワクワクする曲ができたんだって。「あしたの瞳」は世界に誇れるオペラ作品になったと思います。

「メニコンの経営スタイルは 社会のモデルになるはず」



オペラ「あしたの瞳」は、2013年の初演以来、さまざまなバージョンで上演を重ねている。「田中恭一会長と僕の父（作曲家の宮川泰さん）は同じ年の生まれ。天才である父の背中を見て育った2代目の気持ちはよくわかるし、天才の姿を芸術作品にするのは、まさに僕と田中英成社長の役目だったと思います」（宮川さん）

「見る」ことと
「聞く」ことは表裏一体

オペラには英成社長をモデルにした少年も登場します。彼は「音が見える」と言うんですけど、僕もこの感覚がわかる。世間では目に見える情報が重視されがちですが、「見える」ということは意外と「聞こえる」ということなんじゃないでしょうか。たとえば、僕は小学4年生の時に音楽の授業で文部省唱歌の



木のぬくもりを感じさせるHITOMIホール（メニコン本社に所在）。スタインウェイ&サンズのピアノが美しい響きを奏でる。プロによる演奏会が催されるほか、貸しホールとして音楽を学ぶ若者や市民にも広く開放されている

物事の本質を見極め
未来を見渡す経営

古代ギリシャでは、音楽は神

「故郷」を歌って、日本人に生まれてよかったと心から思いました。教科書に挿絵はあったかもしれないけれど、クラス全員が音楽の力で日本の山や原風景をありありと「見た」わけですから、そうした臨場感や心の景色に触れたい、感動して涙を流したい。僕の曲作りの根底にはそういった思いがあります。文学から音楽にいわば翻訳する過程で中心にあるのは、心の動きを捉えて音にすること。ですから、このオペラで「音は見えるし触れるし、形もあるよ」と堂々と言ってくれた不思議な少年を僕は拍手で迎えたい。彼は、「星の王子さま」のような存在です。

のお告げとして発展しました。人間はどうあるべきか。宇宙と自然はどう関係しているのか。そうした根源的なことを考え、未来を占うように、長いスパンで物事を見るのが、僕たち音楽家の仕事の一部でもあります。そうした立場から言うと、メニコンという会社の魅力はHITOMIホールに象徴されています。コンタクトレンズの会社なら視覚的な施設を作りそうなのに、なぜか高性能な音楽ホールが本社にある。これは、先ほどお話ししました視覚情報と聴覚情報の表裏一体のつながりに興味があるとしたかと思えませんが、物事の本質を知って未来を見渡したいという思いの表れだと僕は解釈しています。

「あしたの瞳」には感情がほとばしっています。多くの会社はその時々競争を生き抜くことしか考えていませんが、感情を削ぎ落として目先の株価や数字を追いかける経営は本来おかしい。割り切れない思いを大切に、物事の本質を見極めようとするメニコンの姿勢は、会社の価値を向上させていると感じます。こうした経営スタイルは30年後くらいに社会のモデルになつてくるんじゃないでしょうか。